

## ヴェルレーヌとデボルド＝ヴァルモール

倉方, 健作  
九州大学大学院人文科学研究院 : 助教

<https://doi.org/10.15017/1563566>

---

出版情報 : Stella. 34, pp.145-154, 2015-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会  
バージョン :  
権利関係 :

# ヴェルレーヌとデボルド＝ヴァルモール

倉 方 健 作

## デボルド＝ヴァルモールの受容

ポール・ヴェルレーヌは評論集『呪われた詩人たち』初版（1884年）において、まずトリスタン・コルビエール、アルチュール・ランボー、ステファヌ・マラルメを取りあげた。4年後の新版ではさらにマルスリーヌ・デボルド＝ヴァルモール、ヴィリエ・ド・リラダン、「哀れなレリアン」の3詩人が加えられるが<sup>1)</sup>、このうちデボルド＝ヴァルモールは、他の「呪われた詩人たち」との相違点が少なくないだけに、選択の理由には慎重な検討を要する。唯一の女性という違いにくわえ、活動時期も19世紀前半であり、またヴェルレーヌ自身も文中で言及するおとり、すでにサント＝ブーヴ、ボードレール、バルベ・ドールヴィイらの評論によって一定の評価を得ていた。そのためこの女性詩人が「呪われ」ていたとは必ずしも言えない。

問題はそれにとどまらない。ヴェルレーヌがデボルド＝ヴァルモールのどのような資質や技量を評価し、自らの詩法に取り入れたかという肝心な点もいまだ明確ではない。デボルド＝ヴァルモールが試みた奇数脚詩句、とりわけ11音節で書かれた代表作「悲しい夜の切れ切れの夢」（«Rêve intermittent d'une nuit triste»）が、『歌詞のない恋歌』の4番目の「忘れられたアリエッタ」に影響を与えた可能性は長らく指摘されてきたものの、確実な論証にまでは至っていない<sup>2)</sup>。主な原因はヴェルレーヌによるデボルド＝ヴァルモールの受容時期がいまだ確定していないことにある。

『呪われた詩人たち』では以下のように書かれている――

我々は、良作や佳作に大いに興味を持ちつつも、「巨匠」（ボードレールのことである）の言に満足し、彼女〔デボルド＝ヴァルモール〕について無知であったが、まさにそのときアルチュール・ランボー氏が、美点を含んだ堆積とばかり思い込んでいた「すべて」を我々に明らかにし、読むことをほとんど強いたのだった。

我々のかつての驚きは大きく、説明には時間を要する。<sup>3)</sup>

記述を信じるならば、ヴェルレーヌはランボーに教えられるまで、したがって少なくとも両詩人が出会う 1871 年の秋までは、デボルド＝ヴァルモールを知らなかった。一方で旧友のルベルティエは、ヴェルレーヌが高等中学時代にはすでに詩作品を読んでおり、『サチュルニアン詩集』（1866 年）の時期には、同じく叙情的なラマルティエヌを攻撃する一方でこの女流詩人には夢中であったと証言している<sup>4)</sup>。「我々は彼女を知らなかった」（« nous l'ignorions »）という表現を、本質を知らずにいたという告白と取るならば矛盾は生じないが、ランボーに出会う以前の受容の幅、深度については推測の域を出ない。

またランボーも、「見者の手紙」における詩人評でデボルド＝ヴァルモールの名前を挙げておらず、上述の『呪われた詩人たち』の一節以外にヴェルレーヌの証言を裏付ける資料はなかった。ところが 2001 年に、それまでランボー自筆による創作と思われていた断片がデボルド＝ヴァルモールの詩作品からの抜き書きである事実が明らかとなったため<sup>5)</sup>、ランボー研究においては、受容の問題は新たな検証の段階に入っている。こうした近年の研究情況に鑑み、本論はヴェルレーヌにおけるデボルド＝ヴァルモール受容の再検討を目的とする。

### 不正確な引用

『呪われた詩人たち』の冒頭近くで、文中にデボルド＝ヴァルモールの詩句が引用されている（傍点筆者）――

[...] その前に、これら比較的多量の作品群に「南仏」がまったく欠如している事実には、あらためて立ち返ってみてもいいだろう。さりながら、彼女の北仏は、どれほど熾烈にスペイン的な要素を含んでいることか。（だがそのスペインは、落ち着きと、尊大さと、あのイギリス人以上の冷静さを保持してはいないだろうか）。ともかく彼女の北仏は、「そこに熱烈なカステイリャ人たちが長々と腰を据えた（Où s'assirent longtemps les ferventes Castilles）」北仏である。<sup>6)</sup>

しかしこの詩句はデボルド＝ヴァルモールの作品中には見られない。実際には彼女の「悲しい夜の切れ切れの夢」の詩句がヴェルレーヌの記憶のなかで変容したものだった。本来の詩句は次のとおりである――

そこに熱烈なスペイン人たちが腰を据えにやってくる！ (Où vinrent s'asseoir les ferventes Espagnes!)<sup>7)</sup>

引用の誤りは2度の雑誌掲載で繰り返され、1888年の単行本収録の際にようやく訂正された<sup>8)</sup>。だが以降も当該の詩句を引くとき、ヴェルレーヌは同様の誤りをしばしば犯す。1887年初頭の執筆と推定される、ルネ・ギルを取りあげた『今日の人々』では正しく原文が引用されているが<sup>9)</sup>、1892年11月のオランダ旅行を題材として翌年刊行された『オランダでの2週間』では再び「そこに熱烈なカスティーリヤ人たちが長々と腰を据えた」となり、『呪われた詩人たち』のプレオリジナルの誤りを繰り返している<sup>10)</sup>。最晩年の1895年に執筆された詩篇「マルスリーヌ・デボルド=ヴァルモール」においても引用は正確さを欠く(傍点筆者)――

教会と鐘樓の都市よ、田園地帯には

「うら若きアルベルティエヌたちが溢れ、さらには、

「そこに熱烈なスペイン人たちが長々と腰を据えた」。

かく作品にかく心あり、花と涙よ、フルートとホルンよ。

Cité d'églises et de beffrois, et campagnes

Pleines de «jeunes Albertines», mais, encor,

«Où s'assirent longtemps les ferventes Espagnes.»

Tel l'œuvre et tel le cœur, fleurs et pleurs, flûte et cor.<sup>11)</sup>

1880年代末にいったんは訂正された誤りが、90年代に入り再び現れる理由は、一義的にはそのつど原文を確認しない詩人の杜撰さに求められよう。しかしながら問題はそればかりではない。ヴェルレーヌがいわば偏愛したと言っていい記憶のなかの詩句はいずれも、元々の11脚に対して12音節詩句に変わり、6音節で半句に切れる古典的アレクサンドランとなっている。デボルド=ヴァルモールが操る奇数脚の詩形、とりわけ「悲しい夜の切れ切れの夢」が彼に影響を与えたとする論旨には、不利な証拠と言わざるをえない。

## 刊本の参照と入手

不確かな引用を導いた受容の経緯を時間軸に沿って確認したい。ルペルティエの証言を除けば、ヴェルレーヌによるデボルド=ヴァルモールへの直接的な

言及は、現存するものではロンドンからエミール・ブレモンに宛てた1873年6月24日（もしくは25日）の書簡が最も古い――

詩作品をお送りできればいいのですが。ひとつもないのです。この2カ月というものの、しているのは英語（文法と発話）だけです。そろそろうんざりしてきて、山ほど半句を書けそうな気がしています。

ですからデボルド＝ヴァルモールの『涙』と『哀れな花々』を読んでください。次のような「揺り椅子 *Berceuse*」があります。

子供はまどろむと  
蜂の姿を見るでしょう  
蜜をたっぷり集めて  
天地のあいだで踊る姿を！ 云々。

まさに揺り椅子で眠る子供がいる夏の部屋の様子ではありませんか。この女性の詩はすべてこのように、鷹揚で、繊細でもあり、――ですが本当に心を打つ――驚くべき技量です。最も興味深いのは66年頃にジュネーヴで印刷された『遺稿集』です。<sup>12)</sup>

書簡で引用されている詩句は、1872年から15年にわたり使用されたと推定されるヴェルレーヌの手帳にも敷き写されている<sup>13)</sup>。デボルド＝ヴァルモールの詩集を読んだのは間違いないが、前年の7月4日に着の身着のままパリを立し、以降各地を転々としてきた彼が詩集を所有していたとは考えにくい。それゆえ、大英博物館図書館（現在の大英図書館にあたる）で詩集を閲覧した可能性はこれまでも指摘されてきた<sup>14)</sup>。ヴェルレーヌもランボーも1873年3月末に同図書館の閲覧登録をしており、ブレモン宛の書簡の記述とも、『呪われた詩人たち』の文面とも矛盾しない。くわえて前述のランボーによる抜き書きが判明した現在では、状況証拠として十分であるように思われる。ところが、ヴェルレーヌの滞在時期にもっとも近い時期の大英博物館の蔵書目録を参照すると、詩集『涙』（1833年）も『哀れな花々』（1839年）も、没後刊行の詩集も所蔵されていなかったという事実が判明する<sup>15)</sup>。1886年の段階で同館は、1842年に刊行されたシャルパンティエ版『詩集』と1860年の増補版以外の作品集を所蔵しておらず<sup>16)</sup>、関連書もサント＝ブーヴによる伝記とその英訳があるのみであった<sup>17)</sup>。

他方で、ヴェルレーヌが大英博物館の限られた蔵書に拠ったと仮定すれば、ブレモン宛の書簡に見られるいくつかの誤謬を解釈することも可能となる。『遺

稿集』と呼ぶものの実際のタイトルは『未刊詩集』であり、刊行年も「66年頃」ではなく1860年であった<sup>18)</sup>。この記憶違いは、以前からヴェルレーヌがデボルド=ヴァルモールの作品を知っていたが、ランボーによって作品の魅力にあらためて気付かされて大英博物館で未読の作品群を渉猟した結果に由来すると考えられよう。もともとヴェルレーヌが「悲しい夜の切れ切れの夢」が含まれた『未刊詩集』に愛着を抱いていたのだとすれば、ルペルティエの証言とも、『呪われた詩人たち』の文面とも矛盾しない。そもそもヴェルレーヌは、ランボーがデボルド=ヴァルモールの「すべて」を「読むことをほとんど強いた」と述べているだけで、自分が「すべて」を「読んだ」と書いてはいなかった。また、プレモン宛の書簡に見られる「『涙』と『哀れな花々』」という並列も、大英博物館でシャルパンティエ版『詩集』を参照したと仮定すれば一応の説明がつく<sup>19)</sup>。同書の目次では両詩集からの抜粋は「涙と哀れな花々 Pleurs et Pauvres Fleurs」というセクション名でまとめられており、書簡の文面と一致する。

書簡に見られるもうひとつの誤りは、引用した詩篇のタイトル「揺り椅子」である。当該の詩篇は実際には「寝椅子 *Dormeuse*」という題で詩集に収められていた<sup>20)</sup>。『呪われた詩人たち』においても、詩篇を紹介する際、「寝椅子」と書いた直後に「つまり〈揺り椅子〉のことである」と付記している<sup>21)</sup>。「寝椅子」よりも「揺り椅子 *Berceuse*」が相応しいとヴェルレーヌが判断した理由には、この語が同時に「子守唄」を指すこともあろう（プレモン宛の書簡ではこの意味で用いられているとも考えられる）。しかし一方で、ヴェルレーヌが詩篇を当初から「揺り椅子」として受容していた可能性もある。1868年にはビゼーが同詩篇に曲を付けており、その楽譜は『揺り椅子』（あるいは『子守唄』）のタイトルで流布していたためである<sup>22)</sup>。義母モーテ夫人がピアノ教師であったことにくわえ、義兄のシャルル・ド・シヴリ、友人のカパネル、オペレッタを共作したシャブリエら多くの音楽家に囲まれてサロンにも出入りしていたパリ時代のヴェルレーヌは、歌曲に触れる機会には恵まれていた<sup>23)</sup>。また当時知らなかったとしても、ロンドンで独立した作品として『揺り椅子』を目にしたものとも推測できよう。歌曲『揺り椅子』は大英博物館にも所蔵されており<sup>24)</sup>、閲覧可能なデボルド=ヴァルモールの作品が限られているなかで、ヴェルレーヌが楽譜を手にとった蓋然性は十分にある。

## 反・高踏派としてのデボルド＝ヴァルモール

ロンドン滞在期以前も以降も、ヴェルレーヌがデボルド＝ヴァルモールの詩集を所有していた形跡はない。ランボーとの出奔後、パリの自宅に残した持ち物を列挙して所有権を主張した2通の書簡には彼女の作品は記載されていない<sup>25)</sup>。ただし後年、1870年代半ばには入手を検討したことはあったらしく、前述したヴェルレーヌの手帳に記された渉獵対象の書籍一覧には「デボルド・ヴァルモール（全詩集）」という記述がある<sup>26)</sup>。しかし同手帳に記載された1880年代半ばの蔵書リストには女流詩人のいかなる作品も見あたらない<sup>27)</sup>。『呪われた詩人たち』の執筆に際しても、図書館等で詩集を参照したことが1885年8月7日のシャルル・モリス宛書簡からうかがわれる――

月曜よりもむしろ火曜に、あなたの部屋で会いたいのですが、――本を参照して (ès-biblio) デボルド＝ヴァルモールを仕上げたいので。<sup>28)</sup>

留意すべきは書簡の日付である。『リュテース』にデボルド＝ヴァルモールを扱った『呪われた詩人たち』の冒頭部分が掲載されたのは1885年6月であった。つまり連載の開始時には、ヴェルレーヌの手元には（使い古した手帳の抜き書きを別にすれば）彼女の作品はなにひとつなかったのである。初回掲載分の「マルスリーヌ・デボルド＝ヴァルモール」に、記憶のなかで変容した「悲しい夜の切れ切れの夢」の1行以外に引用が見られない理由はここにある。こうした準備不足は、コルビエール、ランボー、マラルメの例では認められない。『リュテース』から『ラ・ヴォーグ』への掲載誌の変更も含め、「デボルド＝ヴァルモール」執筆の停滞はこれまで離婚や母親の死などヴェルレーヌの身辺の多事により説明されてきたが<sup>29)</sup>、むしろ資料の欠如から来る必然的な中断であったと見なしていいだろう。

それではなぜヴェルレーヌは、デボルド＝ヴァルモールを「呪われた詩人」として選び、見切り発車のように連載開始に踏み切ったのだろうか。理由は後年の批評文に求められる。1894年8月8日の『ル・フィガロ』に掲載された「デボルド＝ヴァルモールについて」と題された記事の冒頭部である――

きわだって非個人的で不感無覚の詩人 (le poète impersonnel et impassible par excellence)、ルコント・ド・リールの死をきっかけに、あの別の詩人、きわめて個人的で (bien personnel) この上なく情熱に満ちた (passionné d'il en fut) マルスリー

ヌ・デボルド＝ヴァルモールを蘇らせるのは興味深いことのように思われる […]。<sup>30)</sup>

「非個人的」と「きわめて個人的」、「不感無覚の」と「この上なく情熱に満ちた」。文中に用いられた対立的な形容には、ルコント・ド・リールとデボルド＝ヴァルモールとを両極端の詩人像として位置づけ、そのうえで後者の積極的な評価を試みるヴェルレーヌの意図が透けて見える。記事の掲載の直前、7月17日に没したルコント・ド・リールに対してヴェルレーヌはそれまで追悼文を発表したことはなく、死後初めての言及がこのような形であったのは、パリ・コミューンの時期にまで遡る両者の長い対立の証左である。高踏派の首魁、アカデミー会員の「死を契機として」、「呪われた詩人」のデボルド＝ヴァルモールを「蘇らせる」という図式には、ルコント・ド・リールの死後に「詩王」に選ばれ、若手詩人に囲まれた遅まきの文壇的成功を謳歌するヴェルレーヌ自身の姿が二重映しになっていると見ても、あながちうがった解釈ではないだろう。「呪われた詩人」がついに「呪い」を振り払った感慨が、ここではデボルド＝ヴァルモールの名とともに表明されている。

高踏派への当てこすりは『呪われた詩人たち』の各所に見られた。コルビエールの完璧さの欠如を好意的に評価したうえで、「完全無欠の人々とは、つまり……あいつらやあいつらである。朴念仁、朴念仁、どこまでいっても朴念仁。コルビエールはごく自然に、肉と骨でできている」<sup>31)</sup>と書くヴェルレーヌの念頭にあるのも高踏派の詩人たちの姿である。しかも彼によれば、マラルメが独自の詩境を切り開いた契機は「高踏派どもの頭でっかちの《フ・カ・ン・ム・カ・ク》(l'Im-pas-si-bi-li-té)に苛立って」<sup>32)</sup>であった。ヴェルレーヌから見たデボルド＝ヴァルモールもまた、奇数脚を軽やかに操る詩人である以前に、感性の詩人、情熱の詩人であり、いわば「反・高踏派」として仰ぐべき先人であった。『呪われた詩人たち』でことさらに女流詩人を持ち上げた背景には、ランボーとともに高踏派のサークルから放逐された経緯や、流謫の地ロンドンでの生活の記憶が、読書体験と不可分に結びついていたためであろう。

詩集の現物を参照し、正確な引用を散りばめながら書かれた後半部には、手元に何もないうまま記憶だけで書かれた冒頭部の勢いが削がれている感がある。おそらくヴェルレーヌにとって、デボルド＝ヴァルモールはテキストとしての存在ではなかった。両詩人の影響を論じる際には、完成された詩篇を対比する



のではなく、いわば厳密な単語や韻律から解放された、ヴェルレーヌ独自のデボルド=ヴァルモール像の把握が必要とされる所以である。

## 註

- 1) 『呪われた詩人たち』の構成と執筆の経緯に関しては以下の拙論を参照されたい——「無名の詩人、半ば未知の詩人、不遇の詩人——ヴェルレーヌ『呪われた詩人たち』のロジック——」、『ステラ』第33号、九州大学フランス語フランス文学研究会、2014年12月、237-247頁。
- 2) 両詩篇の影響関係はすでに最初のプレイアッド版において示唆されている (Paul VERLAINE, *Œuvres en prose complètes*, éd. Yves-Gérard LE DANTEC, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1938, pp. 902-903)。2013年にも両詩篇の関係を扱った論文が発表されているが (Christine PLANTÉ, «Verlaine et Desbordes-Valmore : Les deux *pleureuses* de l'ariette IV», *Revue Verlaine*, n° 11, 2013, pp. 15-41), いまだ決定的な論証には至っていない。
- 3) Paul VERLAINE, *Les Poètes maudits*, éd. Michel DÉCAUDIN, Paris : C.D.U. / SEDES, 1982, p. 52. 註釈に従い初出時の文章を復元して訳出した。
- 4) Voir Edmond LEPELLETIER, *Paul Verlaine, sa vie, son œuvre*, Paris : Mercure de France, 1923, pp. 59 et 147.
- 5) Voir Lucien CHOVET, «Un *faux Rimbaud* encore non identifié ou Marceline Desbordes-Valmore, plagiaire par anticipation de Rimbaud», *Histoires littéraires*, n° 5, janvier-février-mars 2001, pp. 61-66 ; Olivier BIVORT, «Les “vies absentes” de Rimbaud et de Marceline Desbordes-Valmore», *Revue d'Histoire littéraire de la France*, 2001/4, vol. 101, pp. 1269-1273.
- 6) *Les Poètes maudits*, *op. cit.*, p. 52. 初出時の文章に拠る。
- 7) *Les Œuvres poétiques de Marceline Desbordes-Valmore*, éd. Marc BERTRAND, Presses universitaires de Grenoble, 2 vol., 1974, t. II, p. 532. 没後刊行の『未刊詩集』(*Poésies inédites de Marceline Desbordes-Valmore*, Genève : Imprimerie de Jules Fick, 1860) 所収。
- 8) 『リュテース』第176号 (1885年6月7-14日) および『ラ・ヴォーグ』第2号 (1886年4月18日)。また前掲拙論 239-241頁を参照。ミシェル・デコーダンの『呪われた詩人たち』校訂判では『ラ・ヴォーグ』掲載時にのみ引用文の誤りが見られるとしているが正確ではない (*Les Poètes maudits*, *op. cit.*, p. 52)。『リュテース』のリプリント版 (*La Nouvelle Rive gauche* puis *Lutèce*, Genève : Slatkine Reprints, 1974) 参照。
- 9) *Œuvres en prose complètes*, *op. cit.*, p. 822. ヴェルレーヌは『今日の人々』の版元

- であるヴァニエに宛てた1887年2月24日の書簡で原稿料の領収証に言及している (*Correspondance de Paul Verlaine*, éd. Ad. VAN BEVER, Paris : Messein, 3 vol., 1922-1929 ; Genève : Slatkine Reprints, 1983, t. III, p. 69)。
- 10) Paul VERLAINE, *Œuvres en prose complètes*, éd. Jacques BOREL, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1972, p. 365. ジャック・ボレルは註釈で「ヴェルレーヌが偏愛したマルスリーヌ・デボルド=ヴァルモールの詩句であり、何度も引用されている」(*ibid.*, p. 1265)と書いているが、出典は示していない。
  - 11) Paul VERLAINE, *Œuvres poétiques complètes*, éd. Jacques BOREL, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1962, p. 641. 生地ドウエに建てられたデボルド=ヴァルモール像の除幕式のためにヴェルレーヌが生前に書き、死後に発表された (voir Jean-Louis DEBAUVE, «Verlaine et le monument de Marceline Desbordes-Valmore à Douai», *Revue Verlaine*, n° 3-4, 1996, pp. 285-293)。なお「アルベルティース Albertine」はデボルド=ヴァルモールの作品に頻出する女性名であり、「花と涙 fleurs et pleurs」は詩集『哀れな花々』と『涙』を示している。
  - 12) Paul VERLAINE, *Correspondance générale*, t. I, éd. Michael PAKENHAM, Paris : Fayard, 2005, p. 329.
  - 13) Voir V. P. UNDERWOOD, «Le carnet personnel de Verlaine», in *Autour du symbolisme. Villiers - Mallarmé - Verlaine - Rimbaud*, études réunies par Pierre-Georges CASTEX, Lille : Faculté des lettres et Paris : José Corti, 1955, pp. 177-226.
  - 14) アンダーウッドは前掲論文および単著 (V. P. UNDERWOOD, *Verlaine et l'Angleterre*, Paris : Nizet, 1956) でそうした可能性を指摘してきた。現行のプレイアッド版『全詩集』巻頭年譜も、1873年6月にヴェルレーヌとランボーが「大英博物館に通い、デボルド=ヴァルモールを読む」と記しているが、確たる根拠があるわけではない。
  - 15) *Catalogue of Printed Books in the Library of the British Museum*, 393 parts, London : William Clowes and sons, 1881-1900 ; *Supplement*, 44 parts, London : William Clowes and sons, 1900-05. デボルド=ヴァルモールの著作が含まれる「Denmark-Descurze」の巻は1886年刊行。
  - 16) *Poésies de Madame Desbordes-Valmore*, nouvelles éditions revues et corrigées, Paris : Charpentier, 1842 ; nouvelle édition augmentée et précédée d'une notice par M. SAINTE-BEUVE, Paris : Charpentier, 1860.
  - 17) C.-A. SAINTE-BEUVE, *Madame Desbordes-Valmore, sa vie et sa correspondance*, Paris : Michel Lévy, 1870 ; C. A. SAINTE-BEUVE, *Memoirs of Mme Desbordes-Valmore, with a selection of her poems, translated by Harriet W. PRESTON*, Boston : Robert Brothers, 1873.
  - 18) 前註7参照。
  - 19) ランボーの抜き書きがシャルパンティエ版『詩集』に基づく可能性は近年の研究で指摘されている。Voir Michel MURAT, «Les “mondes d'idées” de la femme : Rimbaud, Louisa Siefert, Marceline Desbordes-Valmore», *Parade Sauvage, Colloque*,

- n° 4, 2002, pp. 51-64.
- 20) 『哀れな花々』所収。しかしシャルパンティエ版『詩集』では、「涙と哀れな花々」ではなく、「小さな子供たちに Aux petits enfants」という独自のセクションに収められている。
  - 21) 『ラ・ヴォーグ』掲載時の文面。単行本ではさらに「このほうがどれだけ良いか！」との文言が加えられている (*Les Poètes maudits, op. cit.*, p. 59)。
  - 22) *Berceuse sur un vieil air*, poésie de Mme Desbordes-Valmore, musique de Georges Bizet, Paris : G. Hartmann, [s. d.]. 『フランス書誌』1868年10月24日に登録。これ以前にエルネスト・ドレ (Ernest Doré) という作曲家が曲を付けているが、タイトルは「寝椅子 *Dormeuse*」であった。
  - 23) シャプリエはビゼー論を書いている。Voir Roger DELAGE, «Chabrier et Verlaine», *Revue Verlaine*, n° 2, 1994, p. 7.
  - 24) 現在大英図書館が所蔵している楽譜には1868年12月16日の印が押されている。音楽学者ヒュー・マクドナルド編集によるビゼー作品のデジタル・カタログ記載の情報 (<http://digital.wustl.edu/bizet/works/Berceuse.html>) を参照した。
  - 25) Voir *Correspondance générale*, t. I, *op. cit.*, pp. 268-270 et 289-290.
  - 26) UNDERWOOD, *art. cité*, p. 196. アンダーウッドは1875年頃のメモと推定している (*ibid.*, p. 223)。ただし「全詩集」に近いデボルド=ヴァルモールの著作集の刊行は1886年を待たねばならない (Marceline DESBORDES-VALMORE, *Œuvres poétique*, 3 vol., Paris : Lemerre, 1886-1887)。
  - 27) UNDERWOOD, *art. cité*, pp. 187-191.
  - 28) *Correspondance générale*, t. I, *op. cit.*, p. 906. 「本を参照して (ès-biblio)」の実状は明らかではないが、書簡集の編者パケナムは「ヴェルレーヌが図書館で資料を収集したという事実の唯一の示唆」と注記している (*ibid.*, p. 907)。
  - 29) デコーダンもこの説を採っている。Voir *Les Poètes maudits, op. cit.*, p. 9.
  - 30) «À propos de Desbordes-Valmore», *Œuvres en prose complètes, op. cit.*, p. 927.
  - 31) *Les Poètes maudits, op. cit.*, p. 20.
  - 32) *Ibid.*, p. 40.